

「黄金餅」の経済人類学

FUKADA, Juntaro / 深田, 淳太郎

(出版者 / Publisher)

法政大学経済学部学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

経済志林 / The Hosei University Economic Review

(巻 / Volume)

88

(号 / Number)

3

(開始ページ / Start Page)

223

(終了ページ / End Page)

242

(発行年 / Year)

2021-03-20

【研究ノート】

「黄金餅」の経済人類学

深 田 淳太郎

古典落語に「黄金餅」という噺がある。まずは粗筋を紹介しよう。

- ① 下谷山崎町にある貧乏長屋に西念という貧乏坊主が暮らしていた。どこかで不幸があったと聞いては押しかけて念仏を唱え、不幸がなくても通りの店の前で勝手に念仏を唱えては小金をせびる。題目は南無妙法蓮華経のこともあれば、南無阿弥陀仏のこともある。出鱈目である。西念は大変に吝嗇で、こうして集めた金を貯め込むことだけが生き甲斐だった。
- ② そんなある日、西念は風邪をこじらせて寝込む。そこに同じ長屋の隣部屋に住む金山寺味噌売りの金兵衛がお見舞いに来た。金兵衛は医者にかかった方がいい、薬を飲んだ方がいいと勧めるが、西念はそんなものには金を払いたくないという。それならばせめてと、金兵衛は西念が食べたがった餡ころ餅を近所の餅屋から買ってきてやる。西念は礼は言うが、金は出さない。さらに、人が見ていると食べられないからと、金兵衛を部屋から追い出す。
- ③ 金兵衛は不満げに自分の部屋に戻るが西念の様子が気になる。壁の穴からのぞいてみると、西念は妙な動きをしている。餡ころ餅の餡と餅をより分けて、餅になにかを包んで一心に飲み込んでいるのである。包んでいたのは、西念が貯め込んでいる金だった。かなりの量である。「あの野郎、貯め込んでやがったな」と様子を見ていると、西念が苦し

み出す。金兵衛は慌てて部屋に飛び込むが、西念はそのまま絶命してしまった。

- ④ 金兵衛は西念が飲み込んだ金をどうにかして手に入れたい。まさかその場で腹を裂くわけにもいかないということで一計を案じ、死体を火葬した後の骨揚げのときに金を取り出すことにする。西念の死を長屋の大家に報告し、西念の死体を菜漬けの樽に入れ、長屋の連中と一緒に夜の江戸の町を歩き、金兵衛に縁のある麻布の寺まで運んでいく。
- ⑤ 貧乏寺での弔いが終わると長屋の連中を追い返し、金兵衛は一人で西念の死体が入った樽を担いで焼き場へ行く。夜中の焼き場で、「仏の遺言だ。腹だけは生焼けにしてくれ」と注文を付けて、いったん品川に戻る。屋台で一杯引っかけ夜が明けると、金兵衛は焼き場へ戻る。注文通りに焼け残った死体の腹を包丁で開き、西念が貯め込んだ大金をせしめた金兵衛は、「骨は犬にでも食わせろ」と吐き捨て、焼き賃も払わずに去っていく。
- ⑥ 「この金をもって目黒に餅屋を出しまして、たいそう繁盛いたしました。江戸の名物小金持ちの由来の一席。」(古今亭志ん生 1989)

びっくりするくらいあっさりこの話は終わる。最後のフレーズは古今亭志ん生が演じると、たった七秒、一息で言い切っている¹⁾。立川談志も同様に、金兵衛が「あばよ」と焼き場から去ると、二十秒程度で同じ形であっさりと終える²⁾。

オチらしいオチが無いということから、この噺は分類すると人情噺というカテゴリーに入る。だが、世間で通常考えられる「人情」からは程遠いこの噺に、なんらかの引っかかりを感じない人はいないのではないだろうか。人情以前の通常の道德規範からしても、人の金を奪うことも罪ならば、

1) CD五代目 古今亭志ん生 (1990) 『NHK落語名人選1 / 古今亭志ん生 (五代目)』, NHKサービスセンター。

2) CD立川談志 (1997) 『立川談志ひとり会落語CD全集第16集』, 日本コロムビア。

死体を蔑ろにすることも罪である。金兵衛は然るべき罰を受けるべきだ、と思ってしまうだろう(少なくとも私はどうしてもそう思ってしまう)。しかし、この噺では金兵衛には何の天罰もくだらないし、誰に懲らしめられることもない。それどころか、奪った金ではじめた餅屋は大繁盛し、後の世にまで名が知られる江戸の名物になってしまうのである。

この道徳的な引っかかりは、噺の舞台である江戸の町に暮らす人々と、現代に生きる私たちの感覚のズレから来ているという面もあるかもしれないが、おそらくはそれだけではない。立川談志は、主人公である金兵衛の「映画の悪役なんてもんの比ではない」人間の「醜悪」な姿を現実として認めているこの噺を「人間の業の極致まで描く落語の本質」と評している(立川談志 1993: 36-37)。また志ん生の「黄金餅」についての解説では、この噺の特徴は次のように述べられている。

たいていの人情噺は、たとえ悪人を題材としている場合でも、始末は勧善懲悪・因果応報的なものであるが、『黄金餅』にはそれがなく、しかも、不正な手段で得た金を資本として餅屋をはじめ、たいそう繁盛したという、誠に不都合きわまる噺である(古今亭志ん生 1989: 50)。

三遊亭円朝(1839-1900)が作ったというこの噺を、登場人物の名前や舞台となる場所を変え、後に紹介する上野から麻布までの道中の地名の言い立てや細かな定番のクスグリなども含めて、現在演じられている基本的な形に整えたのは、五代目古今亭志ん生(1890-1973)である。飯島友治の解説によれば、志ん生は、この「醜悪に過ぎる」噺を「飄逸な人柄と、独自のクスグリによって巧みに補い」、「楽しんで聞ける」ように演出した(志ん生 1989: 50-52)という。これは裏を返せば、この噺が当時から非道徳的で金兵衛の行動があまりにも罰当たりであったということであろう。引っかかりを感じるのは、私たちが現代の感覚で聴いているからだけではないのである。

志ん生が演じたものを聴くと、たしかに明るい調子で飄々と演じられており、楽しく笑って聴けるものになっている。だが、それでもこの噺の結末の異様さが弱まるということはない。むしろ、明るい調子で語られるだけに、逆に結末部分で放り出すような演出は、突然の暗転のような落差を感じる。また、志ん生の後のこの噺の代表的な演じ手である立川談志（1936-2011）は、マクラで当時の貧民窟の生活の悲惨さをたっぷり語り、金兵衛の行為の陰惨さを強調して描写するなど、この噺の闇の部分を濃く演じるが、その場合でもやはり結末の金兵衛の成功はあっさりとして演じられ、突然の暗転（明転）が演出される。いずれにしても極端な明暗の切り替わりで、聴いている側の感覚を揺さぶるのが「黄金餅」の特徴であると言えよう。

本稿では、この噺において、そのタイトルからも分かる通りに中心的なテーマである金（黄金）がどのように捉えられているのかについて分析してみたい。この「黄金餅」を貨幣のあり方に注目して論じたものに、島岡光一の『志ん生「黄金餅」の経済学外論』（1993）がある。島岡は経済学の観点からこの噺の分析を行っているが、本稿では主に文化人類学の観点から、噺の設定や展開、登場する道具、そして演ずる落語家がそれぞれ足したり引いたりするギャグや、ときには作り替えていく話の展開について、読み解いていく。

以下の分析では、基本的には五代目古今亭志ん生が演じたバージョンを参照し、補助的にこの噺を作った三遊亭円朝、そして志ん生以後のこの噺の代表的な演じ手二人である立川談志、三遊亭志ん朝のバージョンのいずれも文章化されたものを参照する³⁾。またこれらの演者とそれ以外の演者

3) 古今亭志ん生は『古典落語 志ん生集』（古今亭志ん生（1989））を参照し、以下、本文中でこの本について言及するときは（志ん生：ページ数）と表記する。同様に三遊亭円朝については『明治の文学 第3巻 三遊亭円朝』（坪内祐三編（2001））を参照し、（円朝：ページ数）と、立川談志については『立川談志 独り会 第三巻』（立川談志 1993）を参照し、（談志：ページ数）と、古今亭志ん朝については『志ん朝の落語』（古今亭志ん朝（2004））を参照し、（志ん朝：ページ数）と表記する。

の口演を録音した音声データも適宜参照していく。

1. 守銭奴一西念

この唄における西念の守銭奴としてのキャラクター描写は徹底したものである。乞食坊主の西念は、雨の日も風の日も町を歩き回り、巷間で念仏を唱えてカネを受け取る。だがその念仏は出鱈目もいいところで⁴⁾、相手も西念にはなにも期待してはいない。金を渡して厄介払いしたいだけである。つまり貰う金の対価として、西念は相手になにも与えない。そして受け取った金も一切使わない。

志ん生はこの唄のマクラでいろいろな「吝い屋」を紹介していて、その中には「息を出すのもいや」「棘なんぞさしたって抜かない」（志ん生:54）連中もいると話している。また談志も「懐中から手も出したくない」「うっかり放屁なんぞすると一日悔んじったりして」（談志:11）と演じている。そして西念こそが、この吝嗇の典型である。とにかく金を出したくない。病気になっても金を払うのが嫌で医者にはかからず、「『薬九層倍』って…儲けられちゃいますからね」（志ん生:56）と言って薬も買わない。金兵衛が餡ころ餅を買ってきてやっても、もちろん代金は自分では支払わない。そして西念は、その餅を金兵衛に分けることもせず、部屋に閉じこもって一人で食べようとする。

身寄りは無く、共食も拒否する。もちろん交換にも参加しない。西念は、誰にも何も与えずに、ただただ金を集め、自分一人のためだけに貯め込む。交換や贈与、社交性、コミュニケーションが徹底的に欠如した人物である。単に交換しないのではなく、一方的にもらうだけの一方通行であり、まる

4) 志ん生は「門へ立って『南無妙法蓮華経…南無妙法蓮華経…』なんてんでな、貰って、また他家ィいく。この家は門徒だなと思うと（中略）『合掌して南無阿弥陀仏…』」（志ん生:54-55）と、志ん朝はこれに足して「背中には十字架なんて書いてあったりなんかして」（志ん朝:154）と演じている。

で、いったん吸い込んだら二度と出てこないブラックホールのようなものである。

西念は、ただただ金を貯め続けた人生を、自分にふさわしい形で終わらせようと画策する。そのまま普通に死んでしまったら、一生使わないで貯め込んできた金は、西念に負けず劣らず貧乏な長屋の住人たちにすべて取られてしまうだろう。志ん生は「こんなことが長屋のやつらに知れた日にやァたいへんだからね、西念のからだァなくなっちゃわあ」(志ん生:59)と演じている。そんなことになったら、西念は死んでも死に切れない(「ははあ、この坊主、金が気になって死ねねえんだ」(志ん生:58))。自分が貯め込んだ金を、文字通り、死んでも手放したくないのである。金兵衛が訪ねてきたときに西念は一計を思いつく。餡ころ餅を買ってきてもらい、その餅に金を包んで飲み込んでしまえばいい。そうすれば、文字通りに懐中にしまい込んだまま、あの世まで持っていけるじゃないか、と。

西念が、金を餡ころ餅に包み込むというのは示唆的である。フロイトは「性格と肛門愛」という論文において、肛門性愛と吝嗇、貨幣の関係について論じている(フロイト 1969 (1907))。フロイトによれば、幼児は排便によって、はじめて自分が自分とは別個のなにかを作ることが出来るということを知るといふ。しかるに「財産」の「創造」の観念と排泄はこの点で結びつく。母と良好な関係において気持ちよく排便することは、乳児の自我の形成に大きな意味があることであるとされる。一方で、母子関係が悪く、気持ちよく排便できなかつた場合、乳児は体内に便を溜め込むことの副次的な快感を覚える。これは「財産」の「貯蓄」や「吝嗇」の観念につながるという(栗本 2013: 210-221)。

フロイトの議論を通してみると、餡ころ餅が何をあらわしているかは明らかだろう。立川談志の弟子である立川談笑⁵⁾は、垢まみれの西念が餡こ

5) 立川談笑の口演は文章化されておらず、音源も公には発行されていない。ここで参照している音源は、立川談笑が「DMMオンラインサロン」で主催しているオンラインサロン「立川談笑 落語長屋」に会員限定で公開された、第31回毎日落語会「談笑 DE SHOW 5」(2014年7月17日於今池ガスホール)で演じられた「黄金餅」を録音したものである。以下、このバージョンを参照する際には(談笑)と記述する。

る餅を弄くり回している様子を覗き見ていた金兵衛に「あんことうんこわからなくなっちゃうぞ」と言わせている。餡にまみれた餅は排泄物であり、同時に金でもある。敢えて腑分けするならば、餡が排泄物、餅は金ということになるだろう。いずれにしても、それは一体になって、貯めたくもありません。また出したくもあるという、排泄物／金の両義性をあらわしている。

西念は餅に金を包み込んで飲み込もうとする。金を飲み込むとはどういうことだろうか。金は市場における他の商品とは異なり、それ自体を消費するためのものではなく、商品の流通を滑らかに回す媒介の役割を果たすものである。金を手に入れた人は、それ自体に執着して貯めこむのではなく、それを使って商品を買う。そうすることで経済が回っていくのである。食べ物として獲得したものは、食べられて体内を通過して、排泄物として体内から出て行く。市場の主役を金と考えれば、人間はその通過点であるべきなのである。手に入れた金は使わねばならないのだ。だが、西念はこの金についての市場的モラルに反して、それを流通させずに、貯め込もうとする。

ここで餡ころ餅はこの矛盾を表現し、そして西念なりに解決するための恰好の小道具になっている。餡ころ餅は排泄物であり、同時に食べ物でもある。貨幣に執着する西念は、同時に食糞愛好家として排泄物＝餡ころ餅（に包み込んだ金）を飲み込んで体内に貯め込み、市場での循環（＝この世でのコミュニケーション）から共に退場しようとしたのである。

2. 落ちこぼれの商売人—金兵衛

商人である「金」兵衛は、本来は市場で循環すべき金が西念の体内に貯め込まれ、この世から持ち出されていくことを看過することはできない。志ん生は「もったいねえことォしゃがんなァ、天下の通用を飲んで死んじめェやがった…取れねえかな…これな」（志ん生:58）と、談志は「大変なことしやんなあ…天下の通用金腹におさめて、土の中に野郎埋まっちゃまお

うって見だけど…なんとか取れねえかな、こんちくしょう」(談志口演⁶⁾)と演じる。「通用」あるいは「通用金」は、言うまでもなく上述の市場のモラル——金は市場で流通するべきものだ——が含み込まれた語である。金兵衛は金山寺味噌を金で買ってきて、それを町で売って金を得る商人である。商品と貨幣を交換し流通させているという点で、役に立たない念仏を押し付けて、半ば強請りとした金を餅に包んで飲み込んでしまう西念と明確な対比を形作っている。この対比は、柄谷行人が貨幣への欲求のあらわれの異なる二つのタイプとして、「天国に宝を積むため」にこの世で禁欲的な生活を送る守銭奴と、金が欲しいために次から次へと仕入れて売る、仕入れて売るという貨幣の自己運動に飛び込んでいく資本家を対比したものときわめて類似している(柄谷 2001: 311-313)。

ただし金兵衛が商っているのが味噌であるところは、下谷山崎町という貧民街の長屋の住民らしいところである。先だって、餡ころ餅を排せつ物であり同時に金でもある両義的なものとしてみたことの延長線上で考えてみよう。餡と味噌は似てはいるが、餡ころ餅と味噌では決定的に異なる点がある。それは中に餅＝金が含まれているか否かである。味噌は排泄物ではないのだ。金兵衛はおそらくどれだけ真面目に味噌を売り続けても、このままでは貧乏長屋からは脱出することは出来ない。

西念の死は一世一代の大チャンスである。ここから、金兵衛が西念の体内に埋蔵された黄金を発掘する物語が動きはじめる。どうやって体内から貨幣を取り出したらいいのか。もちろんこの場で腹を引っかくわけにはいかない⁷⁾。また、土葬にするとすると、死体は早桶(粗末な棺桶)に入れてそのまま埋められるので、腹の中から金を取り出すのは難しい。だが火葬なら焼いた後の骨を拾うタイミングでチャンスがやってくる。江戸の町では、死体を土葬する場合と火葬する場合の両方があったようであ

6) CD立川談志(1997)『立川談志ひとり会 落語CD全集第16集』(日本コロムビア)より。

7) 談笑は「腹かっ捌いて、そん中からいただいな、うん。それでもって手が血だらけ、それじゃ俺がやったって言ってるようなもんじゃねえか」と演じる。

る⁸⁾。かくして、西念の死体は早桶を買う金など誰も持ちあわせていない貧乏長屋で、その辺に置いてあった菜漬の樽に入れられた。長屋のみんなで手を合わせて、線香をあげ、簡単な見送りを済ませた後に、金兵衛と付き合いのある麻布の寺まで運んで行かれる。

ところで、金兵衛と西念が住んでいた長屋が下谷山崎町にあるというのは、志ん朝が新たに作り出した設定である。もともとの円朝のバージョンでは、長屋は「芝将監殿橋の際」にあるということになっている。場所は変わっているが、しかしどちらも江戸の町の中で指折りの貧困地域であったという点は共通している。江戸末期から明治にかけての江戸・東京の三大貧民窟は、四谷鮫ヶ橋と下谷万年町、そして芝新網であったという（紀田 1990）。この噺をする前のマクラでしばしば当時の貧民窟の貧乏の凄まじさを語る談志は、長屋の誰が早桶を担いでいくのかを決めるくだりで、「今月の月番は誰だい？えっ、猫の皮剥き、あ、そう。来月は？犬殺しか（談志：20）」と演じる。二代目古今亭圓菊も「猫の皮剥きと下駄の齒入れ屋」と演じている⁹⁾。ここで挙げられている職業からも、この長屋がどのような場所であったかは想像できるだろう。

ちなみに円朝と志ん生のバージョンでは、ここで菜漬の樽を担いで行くのは納豆屋と下駄の齒入れ屋である。わざわざそんなことを指摘するのは、商売の種類を問題にしたいからではない。長屋の住人は貧乏ではあるが、みなそれぞれ商売をもっていることを確認したかったのである。長屋で皆が手を合わせた後、大家は最初「あしたの朝、差担（二人で天秤を担ぐ）で持ってっちゃおうか」（志ん生：60）と提案するが、それに対して金兵衛は「今夜持ってってやろうじゃねえか…今夜」（志ん生：60）と主張する。これは、昼間そんなことをしていたら商売に障るからである。おそらくは

8) 1839年に江戸の湯島で生まれ、江戸の町の様子を知っていたであろう三遊亭円朝のバージョンでは、金兵衛は長屋の大家にわざわざ「当人の遺言で是非火葬にして呉れろと申すことで」と言い、大家はそれに対して「成程、夫は何どうも御奇特な事で」と返している。

9) CD二代目古今亭圓菊（2010）『なごやか寄席 二代目古今亭圓菊～黄金餅／錦の袈裟（「なごやか寄席」シリーズ）』、ユニバーサルミュージック。

長屋の連中は皆、それなりに真面目に忙しく働いている。しかし文字通りの貧乏暇なしである。当時「人を殺すに手間ヒマいらぬ、雨の十日もふればよい」と言ったように、彼らは毎日汗水たらして働き続けなければ死んでしまう。実際に明治初期の貧民街の住人たちは「残飯屋」で食料を調達していたという。四谷鮫ヶ橋は陸軍士官学校が、芝新網町は海軍兵学校の側にあり、これらの軍隊の残飯が払い下げられていた（紀田 1990）。市場で正規に流通している食事を買うことはできず、廃棄されたものしか食べられないのである。どれだけ懸命に働いても、市場の落ちこぼれである貧乏長屋の住民の手元には金は残らない。

商品売って金を手に入れ、その金で商品を仕入れてまた売る。こうして市場で金を回転させて、そこで生じた差益を蓄積して商いを拡大し、さらに金が金を生む（ $G - W - G' (G + \Delta G)$ ）というような商売を、神田や日本橋、銀座の本店ではできていたのだろう。しかし貧乏長屋の連中の商売ではいつまでたっても金は貯まらない。残飯を食べて排泄するだけである。 G は G' にならない。「 Δ 」なんてどこにも見つけれない。そこには貧乏人には決して明かされない秘密があるのである。完成した後には自生的にしか見えない資本の運動、金の回転が金を産むというシステムの最初に、大航海時代以降の新大陸からの金銀という外部からの圧倒的な贈与の一撃が隠蔽されていたように。

金兵衛は、どれだけ金山寺味噌をまじめに売り続けようとも、この貧乏長屋を脱け出すことができない。特別ななにかが必要なのである。そして彼は幸運にもそれを発見した。それが西念の死体の中に埋蔵された金である。江戸の町の中「この世」で生きている金兵衛にとって、死んで「あの世」に行った西念の体内にある金は、まさに「外部の圧倒的な富」である。そして、それはまだ完全にはあの世に行ってしまうとはおらず、この世からギリギリ手の届く範囲にある。西念が貧乏長屋の狭い部屋で死んだ瞬間に、金兵衛はその富にもっとも接近した。だが、彼はその富を直接的に手に入れることはできない。なぜなら西念の体内（あの世）と、金兵衛がい

る貧乏長屋（この世）のあいだを隔てている壁に穴を空けてしまえば、そこで起こることは火を見るより明らかだからである。あの世とこの世の気圧の差で、金は流れ出てしまう。長屋の住人たちは西念が随分と貯めこんでいたことを薄々感づいている。「こんなことが長屋の連中に分かったら身体も持って行かれちゃう」（談志:17）のである。そして、この世に流れ出した金は、再び貧乏長屋の連中の決して $G \rightarrow$ にはならない $G-W-G$ の無限連鎖の中に吸収されていくだろう。黄金になりえたかもしれないものは、再び単なる排泄物になってしまう。

金兵衛が西念の死体の内部という手が届きそうで手が届かない、近くのように見えて遠くにある金を手に入れるためには、江戸の町中ではなく、西念の体内という「あの世」と同じ気圧の場所に行かなければならなかった。それが江戸の周縁に位置する当時はまだ草深い麻布であった。

3. 百鬼夜行—この世からあの世への移動

金兵衛率いる貧乏長屋御一行は、江戸の中心にある浅草から南へ南へと下って行く。この道中を町名や建物、名物などを調子よく言い立てていくくんだり、この噺のひとつの聴かせどころである。ここを現在の形に変えたのは四代目橋屋円蔵（1864-1922）と言われているが、なんととっても有名なのは、志ん生である。

下谷の山崎町を出まして、あれから上野の山下へ出て、三枚橋から上野広小路へ出まして、御成街道から五軒町へ出て、そのころ堀様と鳥居様のお屋敷の前をまっすぐに、筋違御門から大通りへ出まして、神田の須田町へ出まして、新石町から鍛冶町へ出まして、今川橋から本白銀町へ出まして、石町から本町へ出まして室町から日本橋を渡りまして、通四丁目から中橋へ出まして、南伝馬町から京橋を渡ってまっすぐに、新橋を右に切れまして、土橋から久保町へ出まして、新し

橋の通りをまっすぐに、愛宕下へ出て天徳寺を抜けて、飯倉六丁目から坂をあがって飯倉片町、おかめ団子という団子屋の前をまっすぐに、麻布の永坂をおりまして、十番へ出まして、大黒坂をあがって、一本松から麻布絶口釜無村の木蓮寺にきたときには、ずいぶんみんなくたびれた」(志ん生：61-62)

さて、こう書くと華やかな江戸縦断ツアーであるが、噺の設定を思い起こしてみると実際に金兵衛たちがここを歩くのは夜中である。神田や日本橋、銀座のような繁華街の大通りを、夜中、死体を入れた菜漬の樽を担いで、いつもはジメジメした路地裏でくすぶっている貧乏長屋御一行が歩いていく。想像してみると、極端な光と影のコントラストが演出されていることが分かる。この異常さは貧乏長屋の連中の外見の異形さに言及することによって強調される。志ん生は「満足な身装をして得るものは一人もいません(志ん生:61)」と演じ、志ん朝は「下駄と草履と片っぽずつ履いてきたり(志ん朝：160)」と演じる。夜中なので提灯が必要だが、談志は「提灯たって、元提灯ってやつだ。元弓張とか、元ぶら提灯とか、中には「盆提灯」持ってくるやつがいたり(談志:21)」と言い、談笑はさらに「中には義足のやつもいて」などいろいろと足した上で「百鬼夜行」(談笑)だと演じている。

昼間は華やかな大通りを、真夜中に貧乏人たちが異常な格好をして行進する。これが日常から非日常への移行の手続きであるということは論を待たないだろう。江戸の中心から外れへ、市中から寺院へ、この世からあの世へ。貧乏長屋の異形の弔い行列は江戸の町を南へ南へと進んでいく¹⁰⁾。

こうしてたどり着いた先は、麻布絶口釜無村の木蓮寺である。すでに書

10) ももとの円朝のバージョンでは、貧乏長屋があるのが芝なので、麻布からはさほど離れておらず、道中の言い立ての演出はない。それでも大家は寺の場所が麻布と聞いて「何うも大変に遠いね」(円朝：357)と言っている。先述のとおり、芝の将監殿橋も江戸の三大貧民窟のひとつであるので、江戸の町中にあるとんでもない貧乏地帯から江戸の「外部」へという移行の構造は共通している。

いたとおり、江戸時代の麻布は草深いど田舎である。神田や日本橋に住む人はこんなところには来たがらないというような「外れ」である¹¹⁾。華やかな大通りをわざわざ夜中歩かせてきた、暗さ、貧しさの演出は徹底している。麻布“絶口¹²⁾”“釜無”村という地名は、言うまでもなくその村の貧しさを言い表している。貧乏市腹減り村一丁目一番地みたいなものである。もちろん木蓮寺も抜かりなく貧乏寺である。金兵衛が門の扉を叩くと、「だれだァ？酒屋の小僧だろう、きまってやがら本当に、夜逃げはしないよォ、一升や二升の酒で」（志ん生:62）と返ってくる。住職の酒飲み生臭坊主は寺の中のあらゆるものを質に入れてしまい、酒屋の掛け取りに神経を尖らせている。仏像も木魚も鈴も何もないので、でたらめな読経の間の「チーン」は欠けた茶碗を叩いている。この寺の何にもない様子を、談志は「とにかく何も無え、祭壇も何も残らず売っちゃったから。何もなくなってガラーンとしていて、まるで、飛行機の格納庫みたいだ。何も無い。一つも無くなっちゃった（談志:26）」と語気を強めて演じる。ここには何もないのである。特に金目のものは何も。ただひとつ、西念の体内に埋蔵された金を除いて。

4. 死体の三角形

貧乏寺でいい加減な供養を済ませた後、金兵衛は長屋の連中を追い返し、夜闇の中をたった一人で、西念の死体が入った菜漬の樽を担いでさらに南に下っていく。焼き場は桐ヶ谷にある。現在でも火葬場と葬儀場がある桐ヶ谷は目黒のほど近く、目黒はこの壱の最後に金兵衛が餅屋を出す場所である。

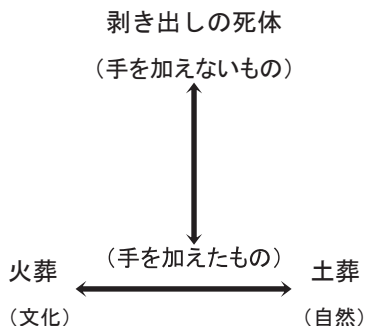
11) 吉原の遊郭が出てくる郭壱では、マクラで「弔いが山谷と聞いて親父行き」という川柳がしばしば引かれる。これは山谷なら吉原が近いのでわざわざ親父が出かけていくという句だが、これの対となる句に「弔いが麻布と聞いて人頼み」というものがある。とても行く気にはならないような田舎だったということである。

12) 現在の麻布にも「絶江坂」という地名がある。

麻布が江戸の周縁部、外部との境目であるとするならば目黒は完全に外部である。「目黒のさんま」という噺で、殿様が鷹狩りに来るのが、この目黒のあたりである。もはや江戸ではない。ちなみにそこで殿様が絶賛したさんまは「隠亡焼き」と呼ばれるもので、網や串、鉄板などを用いずに、炭の中に直接さんまを突っ込んで焼いたものだという。たしかに美味しそうであるが、味はさておき、見逃せないのはその名前、「隠亡」焼きである。隠亡（おんぼ、おんぼう）とは死者の埋葬や火葬を生業とした者で、「猫の皮剥き」と同じく賤民として差別を受けた人々である。江戸の真ん中に住む殿様が、目黒みたいな田舎に来て「隠亡」焼きのサンマを美味いと大喜びするというストーリーが、庶民にとってなんとも痛快だったことは容易に想像できる。目黒にほど近い桐ヶ谷の焼き場のことを聴衆が連想しなかったはずはない。

金兵衛はこうして、江戸の町から完全に出て、桐ヶ谷の火葬場までたどり着いた。もはやここは「この世」にあって、もっとも「あの世」に近いところに違いない。ようやく西念の体内のあの世と外側の気圧差が無くなったところで、金を取り出すために死体に手を付ける。

ではどのように死体から金を取り出されたのか。ここでは迂遠なようであるが、この噺の中における西念の死体の取り扱いの方法を振り返り、レヴィ＝ストロースの「料理の三角形」を援用して捉えなおしてみたい（レヴィ＝ストロース 2007）。



西念の死体そのものは、まったく手を付けられていない「生のもの」である。処理されていないままの状態にある死体は、なんらかの形で処理されなければならない。先述したとおり、江戸の町では死体の適切な処理には二つの方法があった。ひとつは火葬、もう一つが土葬である。火葬を「火にかけられたもの」の位置に、土葬を「腐ったもの」の位置が重ね合わせることができることは言うまでもないだろう。

金兵衛が土葬ではなく火葬を選択したのは、土葬という「自然」な処理方法、すなわち人間が手を加えずに死体をそのまま埋めるのでは、死体から金を取り出すチャンスがないからである。火葬という「文化的」な方法では、死体は人の手で加工される。そこで遺体が加工されるプロセスに金兵衛が入り込む余地が出来るのである。しかし、このような二項対立が組み合わされて構築されている人間の遺体の処理の三角形の中において、西念の死体はどうもぴったりとおさまりきらないところがある。

まず西念の死体が入れられたのが「菜漬の樽」だったことを思い出そう。死体が早桶に入れられるのは、土葬においても火葬においても同じなのだが、貧乏長屋では早桶を買うことができない。そこで、本来は食べ物を入れるべき容器に、死体を入れるというイレギュラーな状況があらわれた。死体として処理すべきものを食べ物のように取り扱うことは、先だって見た排泄物であり食べ物であった餡ころ餅を思い起こさせる。西念は、死体としてあの世に送られる（排泄される）べきものでありながら、貨幣としてこの世で「食べられ」なければならない。実際に、西念の死体と食べ物の重ね合わせは、この噺を演じる落語家たちが細かなクスグリで何度も繰り返している。志ん生は、西念が死んだすぐ後で、金兵衛に「棒で尻から突っついてみるかな、心太だとでるんだがな」（志ん生：58-59）と言わせている。焼き場に持ち込んだときには、「なんだい？菜漬け持ちって来たのかい？」（志ん生：66）と勘違いされる（金兵衛が持っていたのが菜漬の樽なのだから、あたりまえだ）。金兵衛が早朝に「焼けてるかァい…焼けてるかァい」（志ん生：67）と勢いよく焼き場に戻ってくると、隠亡は「芋っ買

いに来たんじゃあるめえし」(志ん生:67)と答える。この斬では、西念の死体は最後まで、死体であり同時に食べ物であるという、どっちつかずの位置を保ち続けるのである。

「菜漬けの樽」の意味について、別の方向からさらに考えてみよう。漬け物は発酵という「自然」の処理方法で作られる食べ物である。レヴィ=ストロースの分類を用いれば、これは明らかに「腐ったもの」である。したがって、土葬にされるのであれば、ある意味ではその過程として適切な処置であるとみることもできるが、しかしこの樽は焼かれてしまう。すなわち西念の死体は、土葬＝「自然」の方法をとりながら、しかし火葬＝「文化」の方法で処理されるのである。ここでも西念の死体の両義性は慎重に保たれている。

最後の極めつけが、西念の死体の焼き方である。金兵衛は隠坊に西念の死体の焼き方の注文をつける。円朝のバージョンでは「頭と足の方はホンガリ焼いて腹は生焼にはなりますまいか」(円朝:359)と、談志は「生焼けだよ。生焼け。ミディアム・レア」(談志:31)と演じる¹³⁾。腹までしっかり焼かれると、金が溶けてしまうからである。結果、腹の金は上手い具合に溶けず、手足などの末端はきちんと焼けて骨になった。つまりは西念の死体は火で焼かれて骨灰になったが、同時に生のままで残されたのである。こんな中途半端な死体が他にあるのか。

西念はこの世で貯め込んだ金を懐に入れたまま、あの世に逃げ切る最後の一步のところまで迫った。しかし、江戸の町中からこの世とあの世の間まで、執念深く追いかけてきた金兵衛に最後に捕まえられてしまった。ここで西念の死体をもう一度観察してみよう。生焼けのままの白い腹、その周りにからむ灰と骨になった手足。腹の中には金が入っている。何かに似てはいないだろうか。餅とそのまわりにまぶしつけられた餡、そしてその

13) 談笑は、金兵衛に「強火の速火でな」と言わせ、隠坊も「実はおれは日本料理の焼き方をやっていて」などと応える。さらにこの後、焼き上がった西念の死体を前にして金兵衛が「見事、さすがプロ」と褒めた後、「ばかやろう、スダチはいらねえんだ」と演じる。「目黒のさんま」からの西念の隠亡焼きである。

餅の中に包み込まれた金。そうである。あの西念の餡ころ餅は、中途半端に焼かれた西念の死体とその体内の金という形を取って物語の最後に再び登場するのである。

西念が餡と餅をより分けて、餡を捨ておいて、金を包み込んだ餅に執心したのと同じように、金兵衛は西念の腹の周りに残された骨については「犬にでもやっちなえ」と捨ておき、恐ろしい形相で腹に向き合う。鱈切り包丁で腹を切り開き、ついに中から金を取り出すのである。金兵衛はそれを飲み込みはしない。こうして餅の中に包まれた金は、餅の中から解放された。

5. 餡ころ餅か大福か

金兵衛はそのまま江戸の町中の貧乏長屋には戻らず、目黒で餅屋をはじめめる。外部からの贈与の一撃を受取った金兵衛は、貧乏長屋におけるG-W-Gの無限連鎖から離脱し、Gを $G'(G+\Delta G)$ に変えていく秘密を手に入れたのである。守銭奴対市場の対決における、市場側の英雄・金兵衛はそのまま市場で活躍する。金も「天下の通用」として市場を回り続ける。このように市場イデオロギーの側から読んでみれば、黄金餅は、野蛮人西念の腹の中から、貨幣を解放する正義の物語だったのである。この解釈は、先述した島岡の『落語「黄金餅」の経済学外論』でも示されている。

ただ金を貯め込んでいる西念さんのような方を、失礼ながらマルクスさんは「気の違った資本家」と呼び、それを元手として金儲けをする金兵衛さんのような方を「合理的な貯金者」とまで言っています。
(中略)

金兵衛さんは別に餅屋になりたかったのではありませんナ。お金を儲けたかったんです。たまたま西念さんが死際に餡ころ餅にお金を包んで食べたという故事にちなんだまでです。

「黄金餅」には下げがありませんから、どんなにお笑いが多くても人情話の仲間に入られます。手前、非人情話じゃないかと思うんですが。お金はこんなに非情なものですからナ。強いていえば貨幣の資本への転化　これがこの話の下げ、落ちでございましょう。(島岡 1993: 74-77)

金が呪物崇拜の対象から、市場で自己増殖する資本としての貨幣へとその形態を変化させたという解釈は、この噺の結末が聴き手の倫理観を裏切っていくなり突き放すような形になっていることと結び付けると分かりやすい。世界のルールが変わったのだ。

この解釈が説得的であることは間違いない。だが一方で、この解釈ではどうしてもこの噺の結末の気持ち悪さを十分に捉え切れていないようにも思える。金兵衛は餅屋になるのである。西念がどうやって死んだのか、焼けた死体がどういう状態だったのかを考えれば、これは正気の沙汰であるとは思えない。どうして、そんな悪趣味なものを選べたのだろうか。これを島岡が言うように「たまたま」で片付けてしまっていいのだろうか。

ここで、もう一つの解釈として提出したいのは、金兵衛は金を退蔵の危機から解放した市場のヒーローの仮面をかぶりながら、その裏側でやはり貨幣を使わずにため込んでいたのではないかという説である。彼は西念の体内の金をいったんは市場に解放したが、その後再びそれを使いたくない、食べてしまいたいという欲望に苦しんだのではないか。そうだとすると、金兵衛は西念の金を退蔵の危機から救い出したが、同時に西念と同じように餅に執着したことの意味を理解することができる。この解釈でいくと、この噺の結末は「回りオチ」だということになる。この形でオチを演じるのが立川談笑である。

と、お馴染みのおめでたい一席ではございますが、えー、ところがこんなかたちで身についたカネっていうのは、やっぱり、念が残って

使えないんでございますね。せっかく懐にカネが入っても減るのが惜しい。怖いという。

で、こうしてカネを貯め込んでいるときに、ふとしたことから風邪をこじらせて、どっ、と寝付いた。すると隣に住んでいるヤツが、トントン（扇子で床を叩いて）、金兵衛さん、お見舞いに来たよ。

この立川談笑の改作は、餡ころ餅を商った挙句、西念と同じく金に執着した金兵衛が迎えた結末の一つの可能性を示している。もちろん、これは一つの解釈に過ぎない。金兵衛が金を貯め込みたいのか、それとも市場で回したいのかは分からない。だが、これがどちらか分からないことは、むしろこの噺の演題である「黄金餅」（＝金）の本質ではないだろうか。

金兵衛が売った黄金餅がどんな餅なのかは話の中では説明されないが、二つのパターンが考えられる。一つは西念が食べた餡ころ餅のように、餅に餡がまぶしつけられているもので、その餡に栗などが使われていて「黄金色」をしているというものである。もうひとつは大福のように餡を餅の生地で包み込んだもの。餅が栗餅であったり、あるいは金胡麻をまぶしつけければ「黄金餅」と呼んでもいいだろう。

ここまで紹介してきた黄金餅のストーリーでは前者の餡ころ餅の餡が栗餡の方が妥当であるようにも思える。だが実は、この噺のももとの作者である円朝のバージョンでは、西念が食べる餅は餡ころ餅ではなく大福なのである。大福と餡ころ餅は、いずれも餅（金）と餡（排泄物）でできているが、前者では餅が餡をきれいに包み込むのに対して、後者は餅が餡にまみれている。これは、「通用」という市場の論理が、貯めこんでしまいたいという欲求を、「愚かな物神崇拜」として抑圧する啓蒙主義的な貨幣のあり方か、それとも両者が不可分に入り混じったものとしての貨幣を見るのかの違いである。大福であれば、貨幣の資本への転化という解釈が当たっているといってもよいかもしれない。しかし、円朝のバージョンで大福餅を食べるときに、西念は大福餅をそのまま食べるのではなく、結局は中から餡を出した状態にしてしまう。餅はやはり餡がまぶしつけられている状

態が一番美味しいのだ。金兵衛が売り出したという江戸名物「黄金餅」は果たしてどちらだったのだろうか。

参考文献

柄谷行人

2001 『トランスクリティーク』, 批評空間。

紀田順一郎

1990 『東京の下層社会—明治から終戦まで』, 新潮社。

栗本慎一郎

2013 『経済人類学』, 講談社学術文庫。

古今亭志ん生

1989 『古典落語 志ん生集』(飯島友治編), ちくま文庫。

古今亭志ん朝

2004 『志ん朝の落語 5 浮きつ沈みつ』(京須偕充編), ちくま文庫。

島岡光一

1993 『落語「黄金餅」の経済学概論』, 近代文藝社。

立川談志

1993 『立川談志独り会 第三巻』, 三一書房。

坪内祐三(編)

2001 『明治の文学 第3巻 三遊亭円朝』, 筑摩書房。

フロイト, G.

1969 (1907) 「性格と肛門愛」, 『フロイト著作集5』人文書院。

レヴィ=ストロース, クロード

2007 『神話論理 3 食卓作法の起源』, みすず書房。